

— めぐって頭良かったの？

ママの言葉を聞いたミイ姉が、からかうように訊いた時、

— 頭良かったんだよ、この子。図書館に連れてつても、あんたと龍はすぐ飽きちゃったけど、めぐだけはずうっと本読んでたんだから。

— ママは言った。

— マジで？

— 字を覚えたのだって、三人の中で、一番早かった。

— マジか。

— やつとあたしからパパ似が生まれたって、思ったんだけど。

— 今こいつ、本なんか全然読まないじゃん。

— どこでどうなっちゃったのか。

ママとミイ姉がげらげら笑うのを聞いていた。

どこでどうなっちゃったのか。ふたりの会話を聞いていて、めぐ美はうつすらと、本が愉しかった頃のことを思い出した。せいぜい小学校の低学年くらいのことだったが、十二歳のめぐ美にとっては、ものすごく遠い昔に思えた。自宅マンションの隣に、公共の図書館があつて、たびたび訪れた。職員による読み聞かせの回が楽しかった。

絵本に慣れた彼女に、次のステップはごく自然に訪れた。本棚を眺め、華やかな文字の、わくわくしそうな題名の、その背に指をひっかけた。膝の上でそつと開くと知らない世界が広がった。

だけでも次へのステップを、彼女は逃してしまうのだ。本を読んでいると、ミイ姉に「ネクラ」とか「キモい」と言われたり、読んでいた本を取り上げられて隠されたりしたせいだとも言えるが、それだけでなく、めぐ美自身が性格を変えたかった。

小学三年生の新しいクラスで、¹ 同じ班になった「ひなつち」という子と仲良くなった。運動神経抜群で、男子より足が速いひなつ

ちは、本など読まなかった。休み時間を告げるチャイムが鳴ると、真つ先に教室から飛び出してゆくような子だった。ドロケイでも脱走ゲームでもいつも大活躍のひなつちは、クラスの人気者だったから、そんな彼女に声をかけられて、嬉しかった。

ひなつち、めぐ、と呼び合うようになった頃、めぐ美も彼女と同じく「人気者」というポジションの、端っこにいた。ひとりで本を読むのは寂しいこと、実際寂しくなくても、寂しそうに見られることだという考えを、めぐ美は自分に植えた。低学年の頃の自分は、大人数でわあつと盛り上がるノリには気後れした。だけど、ひなつちに引つ張られて遊んでいるうちに、友達はずっと増えていったし、盛り上がることも楽しめるようになってきた。めぐ美は鬼ごっこやドロケイで活躍したし、友達から、友達の多い子だと思われるようになったら、学校が楽しくなった。その自信は、本からでは、得られないものだった。

ひなつちとめぐの間にカナが入り込んだのはいつ頃だったろうと思う。カナは当時の彼女のグループ内で色々と揉めて、輪から飛び出し、なんとなくひなつちとめぐ美と三人で行動するようになったのだ。三人という関係を巧みに操れるほど成熟していない九歳の少女たちは、愛憎帯びた幼稚なパワーゲームを始めるのが常だが、めぐ美とひなつちもカナを取り合うようになり、やがてめぐ美が勝ったのである。小学校四年生になると、めぐ美はほぼカナとふたり組で過ごすようになった。

そして、そのまま、今もカナとめぐ美は² 「親友」だ。

長い付き合いだから、カナの口癖が「でも」だというのは知っている。誰かが目立つと「でも」と必ず否定せずにはいられないカナの、あまりに大きな自尊心を、めぐ美は間近で見続けてきた。「でも」を言いたい相手は、髪型を変えた同級生の時も、朝会で挨拶をする上級生の時も、テレビに出ているアイドルの時も、ティーン雑誌のモデルの時もある。

³ カナの自尊心の強さを、めぐ美は見えて見ぬふりをする。実際、なんでも強気で向き合っていくカナの「でも」には、説得力があるようにも思った。

(中略)

ふだん三時間目の音楽は、専門の三好先生が音楽室で受け持つのだけれど、今日は、合奏会で演奏する『ブラジル』の担当楽器を決めるのが主題だったから、四時間目の学級会とつなげて、三組の教室で話し合うことになっていた。

合奏会は、毎年三学期に開かれ、六年生が卒業前に在校生に「音楽のプレゼン」をするというのがコンセプトだ。クラスごとに別の曲を演奏する。三好先生が、各組の個性に合った曲を選んでくれるのだが、三組は「明るくて、個性的なメンバーが溢れているから」という理由で、『ブラジル』という曲を演奏すると決まっていた。始業式の日に題名だけ聞かされ、ネットの動画などで聴くことができた聴いておいてと言われたが、それきりめぐ美は忘れていた。だけど先週、三好先生がCDで流してくれたのを初めて聴いて、いっ

ぺんで好きになった。知ってる！ 知ってる！ めぐ美は近い席の子たちと言いつつ。どこかで聴いたことがある、軽快なリズムが、終わった夏を思わせた。ブラジルは暑い国なんだろう。時おり聞こえた打楽器のリズムが楽しげで、胸が弾んで、自然と体がリズムを刻みたくなる。

楽器の説明で、めぐ美は「打楽器」に惹かれた。小太鼓、マラカス、タンバリンから選べるという説明だったので、マラカスがいいな、と思った。

「めぐる、何にする？」

遠くの席から大きな声でカナに訊ねられた時、マラカスと言えなかった。やりたい楽器をもう決めているなんて、張り切りすぎている気がしたからだ。

「えー、決められない、てか、なんでもいい」

4 かつたるような声で返すと、

「一緒にアコーディオンにしない？」

カナがさらに大きな声でめぐ美を誘う。

「アコーディオン？」

「やろうよー、めぐ」

カナは周囲を牽制するように言う。

「やろ、やろ、ね。はい、決まり。センス、センス、こちら、アコーディオンね、アコーディオン」

カナが勝手に藤岡（＝担任の先生）に言うのを聞いていた。

「他にはいない？ 今の時点で八人を超えていなければ、ふたりは決定ね」

藤岡がアコーディオンと書かれた文字の下に、見村、前田、と名前を書く。流れるように、全てが決められてゆく。

するとカナの隣の席の武市陽太が、唐突に手を挙げて、

「おれ、マラカスやる！」

勝手に立候補した。

「武市さん、順番に訊いていきますからね。ちょっと待っていてください」

藤岡が制止し、周りがくすくす笑った。

「武市、マラカス似合いすぎ！」

カナは武市を冷やかしてから、

「まやまや、リッチー、アコーディオンに立候補しなよー」

と、席の離れたリッチーとまやまやにも声をかける。彼女はいつもこうだ。教室の中で信じられないくらい傍若無人に振る舞う。同じように自己中心的に振る舞っている、カナは威圧感を与え、武市は面白がられる。違いはあれど、ふたりは心のままに振る舞っている、藤岡は、武市にはちゃんと注意するくせに、カナの振る舞いには見て見ぬふりをする人が多いとめぐ美は思った。

立候補やらじゃんけんやら、一部の楽器にはアコーディオンもあって、ようやく全員の楽器が決まった時には、四時間目が終わろうとしていた。武市は最初の希望通りマラカスを仕留めていた。武市なんかと並んでマラカスをやるよりは、アコーディオンのほうがましだったとめぐ美は思った。

「はい！ では、もうあんまり時間がないけど、皆さん、パートごとに分かれてリーダーを決めてください」

藤岡が言い、それぞれの場所を割り振られる。アコーディオン組は、カナの机の周りに集まることになった。

「やった！ めぐるー！」

カナがめぐ美に抱きつく。

アコーディオンのメンバーは女子六名、男子二名。カナがリーダーをやりたいがるのかと思ったが、打楽器のじゃんけんに負けてアコーディオンになった小磯利久雄が、カナに推薦されて——実態は、押しつけられたようなものだったが——リーダーを引き受けていた。

「ほらほら、リーダー、仕切つてよ」

カナに言われ、小磯が頬を少し上気させながら、楽譜のプリントを皆に配る。

「リーダー、爪きれいじゃね？」

突然カナが小磯の手を取って言うのと、小磯が赤くなってその手をひっ込めた。最近カナはよく小磯をからかう。からかわれるたび、小磯がまやまやの様子を窺うことに、めぐ美は気づいていた。そのまやまやといえば、カナと小磯のじゃれ合いには無関心なふりで、楽譜の上に右手の指をばらばらと弾ませて、鍵盤を叩く真似をしているのだ。

「じゃ、えーと、明日から楽器使って合わせるんで、各自でデキトウにやっておいてください」

「どこまでー？」

カナに問われて、

「えーと」

小磯は楽譜を見て迷っている。

自分で訊いておいて、

「最後までやっちゃお、こんなの」

カナが決定する。ダンススクールに通うカナは、そのレッスンが本格化するまでピアノを習っていた。簡単な楽譜なのかもしれない。

「では、最後までやっというくださーい」

小磯が雑に言い、それに対して不満が出ることもなく、皆「はい」と言い合いながら、楽譜をしまった。

チャイムが響く中、カナが「リーダー、よろしくねー」と、小磯の背中をポンツと叩いた。小磯は迷惑そうに無視している。

夏休みに、塾の講習で忙しいまやまやを除いた三人で、遊びに行った。その帰り道にカナが小磯を好きだと打ち明けた。しかしそれはもう、皆が忘れなければならないことだった。ほぼ同じタイミングで、小磯がまやまやに告白していたのだ。

小磯は、クラスの中でもリーダー的な存在で、一部の女子から「かっこいい」と言われているほどには顔も整っているし、背も高い。だけど、スマホのトークアプリでのまやまやとの会話を保存して仲間たちに送信するという、信じられないバカをしたせいで、今や彼の人気はダダ下がりである。

めぐ美も、誰からともなく回ってきた小磯の保存画面を見た。小磯の告白を、じらしながらも完全に拒否はしない意外なぶりっこぶり——そのぶりっこぶりが小磯を勘違いさせたようだが——を発揮しているまやまやは、女子どうして遊んでいる時の彼女と違うキャラだった。

まやまや、終わったなー。

カナがまやまやに何か仕掛ける気だったら、めぐ美はそれにノろうと思っていた。そもそも、まやまやが小磯とトークアプリでつながっていることも、めぐ美は知らなかった。カナも知らなかったはずだ。これはもう、吊るし上げるしかない。あるいは集団無視かな。

まやまやのやったことは、それに相当する裏切りだ。
しかし、新学期に四人また顔を合わせた時、⁵カナは意外にもまやまやに優しくかった。自分から「小磯に告られたってマジ？」と訊き、まやまやが恥ずかしそうに頷いたら、手を叩いて爆笑した。

カナが小磯を「私服がダサイ」とか「よく見ると猿顔」などと言ってばかにするようになったのはその頃からだ。

(朝比奈あすか『君たちは今が世界』より)

問一 —— 1 「同じ班になった『ひなっち』という子と仲良くなった」とありますが、めぐ美は、ひなっちと出会ったことで、どのように変わりましたか。説明しなさい。

問二 —— 2 「親友」にカギ括弧がついていることで、どのような意味になっていますか。「〜」という意味ではなく、〜という意味。」の形で答えなさい。

問三 —— 3 「カナの自尊心の強さを、めぐ美は見えて見ぬふりをする。実際、なんでも強気で向き合っていくカナの『でも』には、説得力があるようにも思った」とありますが、この部分から読み取れる、めぐ美のカナに対する思いを説明しなさい。

問四 —— 4 「かったるそうな声で返すと」とありますが、なぜめぐ美は「かったるそうな声」を出したのですか。説明しなさい。

問五 —— 5 「カナは意外にもまやまやに優しくかった」とありますが、なぜカナはまやまやを攻撃しなかったのですか。説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「螢の光」は日本の卒業式などで明治時代からうたわれてきたなじみの①シヨウカだ。原曲はスコットランド民謡だが、冒頭の歌詞「螢の光、窓の雪」は、中国の故事に②ユライしている。

今から千六百年ほどまえの東晋代のこと。車胤（？～四〇一年？）は幼いころから学問が好きだったが、家は灯油を買う金にもこと欠くほど貧しかったので、夏がくると練り絹の囊に数十匹のホタルを入れて灯りにし、夜を日について書物を読んだ。孫康（生没年不詳）もまた貧しく、冬は雪明りをたよりに夜ふけまで勉学にいそしんだ。苦学したかいがあつて、成人したふたりは③コウカンにまで出世した。困難にくじけず学問に励む大切さをしめす手本として、古来、中国の読書人たちが好んだ④ビダンである。「螢雪の⑤コウ」という⑥セイゴもここから生まれた。

しかしそのいっぽうで、この故事には懐疑的な人も少なからずいた。ことに怪しまれたのがホタルの光である。清朝の名君・康熙帝は、『康熙字典』や『古今圖書集成』を編纂させるほど学問熱心な皇帝で、みずからも万巻の書を読んだが、古典のなかには眉唾物もあるのではないかと、たとえばホタルの光なんかで本が読めるものだろうかと思いを抱いてもいた。

そこであるとき、⑦ソツキンに百匹あまりのホタルを捕ってこさせ、実際に絹の囊に入れて試してみたところ、文字を判読することすらできなかった。車胤の故事は嘘っぱちであると断じた。宣教師を身近におき、西洋の幾何学や医学、天文学、音楽までを貪欲に吸収した①康熙帝らしい実証的な態度である。（中略）

しかし皮肉なことに、事実は逆だったようだ。天体観測の邪魔になるほど光があふれている現代になって、あえてホタルの光で本を読む実験をした人が少なからずいる。彼らの報告によれば、「読める」（見える）のだ。たとえば大型で強い光を放つタイワンマドボタルを使った実験では、二十四程度ですでに何とか文字が判読できたという。百匹でも読めなかったという康熙帝が使ったのは、北京の紫禁城周辺に生息する光の弱い種類のホタルだったのだろうか。

「螢の光」の故事があながち嘘でないことは証明されたが、だからといって車胤のとった方法が賞賛に値するかはべつの話だ。読めるかいないかはともかく、ホタルを光源にした読書が非現実的であることに、人びとはとくに気づいていた。②こんな笑い話がある。

ある日、孫康が車胤の家を尋ねた。留守だったので、門番に「車胤殿はどちらへ」と聞くと、答えていう。

「へえ、主人は早朝から草むらに螢を捕りに出ておりまして」

後日、今度は車胤が孫康の家を訪ねると、庭のまんなかに孫康が心配そうな面持ちで立ち尽くしている。

「おや、机にも向かわず外でぼんやりしておいでは。こんなに天気の良い日に、なにか気がかりでもおありですか」
「それなんです。どうやら今晚は雪が降りそうになくて」
（明・馮夢龍『笑府』）

（瀬川千秋『中国虫の奇聞録』による）

問一 文中の①～⑦のカタカナを漢字に直しなさい。ハネ・トメなど丁寧でない場合は減点されることもあります。

問二 — 1 「康熙帝らしい実証的な態度」とありますが、それはどのような態度ですか。説明しなさい。

問三 — 2 「こんな笑い話がある」とありますが、この話はどのような点が笑い話なのか。説明しなさい。

解答用紙

氏 名

--	--

問三

--

.....

--

- ①
- ②
- ③
- ④

⑤

⑥

⑦

--	--

.....